2002. 3. 31　第7号

吉野作造記念館だより

〈編集・発行〉吉野作造記念館（古川市福沼一丁目2番3号　TEL23-7100）

吉野作造と東京帝大生たち（嶋中雅子氏寄贈）

この写真は、吉野作造が一九二〇年前後に東京帝国大学学生たちと撮影したものと考えられる。吉野の頭の上に自筆と思われるサインがある。左隣の佐々弘雄（一八九七～一九四八）は東京帝大政治学科時代、社会思想団体の新人会に属し、二十年卒業後、同十一月に助手となり、二十二年七月には渡欧している。写真は佐々が大学生か、副手・助手時代の記念写真と考えられる。他の二人はおそらく新人会関係者か、帝大関係者であろう。写真の旧蔵者は佐々と同期卒業の政治学者蠟山政道（一八九五～一九八〇）である。佐々は何かの記念に蠟山にこの写真を送ったのだろう。卒業記念、あるいは助手就任の記念であろうか。吉野はこの時期最も多忙で、雑誌からの執筆依頼や講演活動を精力的にこなすかたわら、学生たちへの就職あっせんや学資援助、結婚の世話までこまめに行っていた。

戦後、吉野を慕う人びとによって吉野博士記念会が結成された。その趣意書には、吉野が困難な時代に民主主義思想の普及に力を尽くしたことと並び、その人格を高く評価し後世に伝えるべきものとしている。政治思想や業績は時代の変化や後進の研究によって古く見えることはあっても、その人格的影響は人びとの心にいつまでも新鮮に残るようである。

吉野作造講座

近代化遺産をめぐる

2001年
10月13日

近代化遺産とは、幕末から明治・大正・昭和初期にかけて建設された建物や構造物をいいます。一般的に建築系では県庁・駅舎・学校等、土木系では橋・ダム等です。まだ比較的新しい近代化遺産は古くなると壊されることが多いため、現在これらを保護・活用しようという動きが広まっています。一九九六年十月より文化財登録制度が始まり、宮城県内で続々と近代的な建造物が登録されつつあります。古川市ではまだ登録文化財はありませんが、今回のツアーで貴重な近代化遺産を再発見することが出来ました。

①落羽松（市役所）

スギ科の針葉樹で北米東南部・メキシコが原産であるが、日本には明治初期から中期にかけて渡来した。日本名のラクウショウは鳥のような枝が落葉の際、小枝ごとに落ちるさまから名付けられたものである。市役所の落羽松はいつ頃植えられたか記録に残っていないが、樹齢百十年と考えられ、県内では最北に位置している。立地条件は悪いものの、樹高二十二m、幹周二・五mに達し、一ヶ所に二本自生していて大変珍しい。

②古川第一小学校　南北校舎

現在の南北の木造校舎は、北校舎は昭和四年、南校舎は昭和六年に落成した。昭和二年に小学校改築案が町会で可決されたものの、町と町民側との校舎建築意見が合わず度々町民大会が行われたという。建築資材は青森産の檜材を用い（一部は杉）、木造建築時代の学校として最良の建築資材を使用した東北で有数のモダン校舎だった。建築には明治以降、積極的に学校建築に取組んでいた気仙大工が関わっている。

古川第一小学校　南北校舎

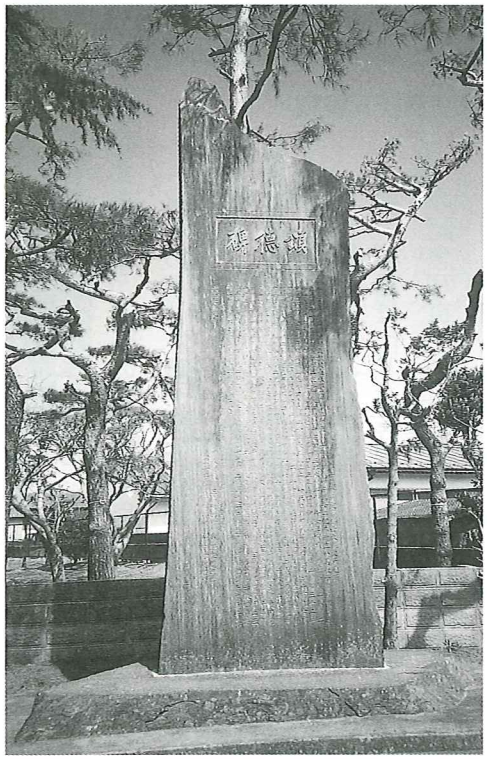
③橋平酒造店

寛政二年創業（一七九〇）。現存する古川の酒造店としては最も古い。酒造店として酒をつくっていたのは昭和六〇年まで。酒銘は「玉の緒」、「をだえの橋」。酒造店の建物は総面積は本来約二、三〇三平方㍍。古川の和衛門大工に修行した伊藤久（ひさし）氏が請け負った。最も古い板倉は西端にあり、酒造関係のワラ細工用品を収納。最も大きいのは大正末に建築された仕込蔵、麹室はレンガ造りで、厚い壁には籾殻がこめられている。なお「もろはく」看板は創業当時のもの。

橋平酒造店にて

④細川松三郎頌徳碑

大正七年二月に古川第一小学校正門前に建てられたもので、高さ四・四m、幅一・五mの粘板岩でできている。碑には、吉野作造が小学校時代（明治二十四年）に教えを受けた細川松三郎の経歴と古川での偉業が称えられている。吉野が生前に古川で造立した唯一の碑で、古川市有形文化財に指定されている。



◀細川松三郎頌徳碑

⑤名生水源跡

古川の上水道の歴史は全国で二番目に古く、明治十六年に起工され、翌十七年に完成したものである。古川は古来良質の飲料水に恵まれず、やむなく市街地中央を流れる緒絶川の水を飲料水に供してきた。しかし明治十五年にコレラが蔓延し六〇余名の死者を出したことが因となり、当時の古川村戸長永澤才吉が自費を投じて調査し、水工会組織で工費をねん出して建設した浄水施設が上水道の始まりである。水源は明治十七年の創設期には夜烏、明治四十二年に完遂した大改修時には名生（名生水源）まで延長した。名生水源は明治三十九年に昔から水が豊富であった名生を、町長佐々木文治が名生新田の篤志家都築又右衛門の案内で発見したもので

ある。この改修工事は上水道事業に対する全国でも初の県補助事業であった。

名生水源池にて

⑥井側（水道部）

水道創設当時に設置された自家用専用井で、市内七日町富士東商店より掘り出されたものである。明治十六年に着工した水道工事は、水源地であった夜烏に貯水したものを土管で送水し、二十二ヶ所の共用井と二十五ヶ所の自家専用井に給水していた。その中の一つの自家専用井で明治十七年四月に完成したものである。住民はこの井戸からつるべ桶や柄杓で汲んで飲料水としていた。

⑦高架水槽（水道部）

高架水槽は昭和九年の上古川排水場建設計画の際に竣工され、昭和十年に完成した。当時は大崎耕土のどこからでもその姿を見ることができ、まさに古川のシンボル的存在だった。完成時、タンクは黒色で塗装していたので、その格好から「黒いふかし釜」の異名があったという。その後、一部は改修しているものの、構造体等は当時のままで現在も使用している。

⑧荒谷の道標

明治二十二年に仙台芭蕉の辻を起点として、仙台藩内の奥州街道（現国道四号）沿いに一里ごとに石の道標が設置された。道標には仙台から一里毎に里数と町村名が記されている。荒谷字竹ノ内にある道標には「陸前国栗原郡長岡村距仙台元標十二里　明治二十二年四月　設宮城県」と刻まれている。ただし現在の道標の位置は、国道の改修に際し修正が行われたため正確な位置ではない。

荒谷の道標

⑨通揚の道標

小野字中蝦沢にある道標には「陸前国栗原郡長岡村　距仙台元標十三里明治二十二年四月設宮城県」と刻まれている。

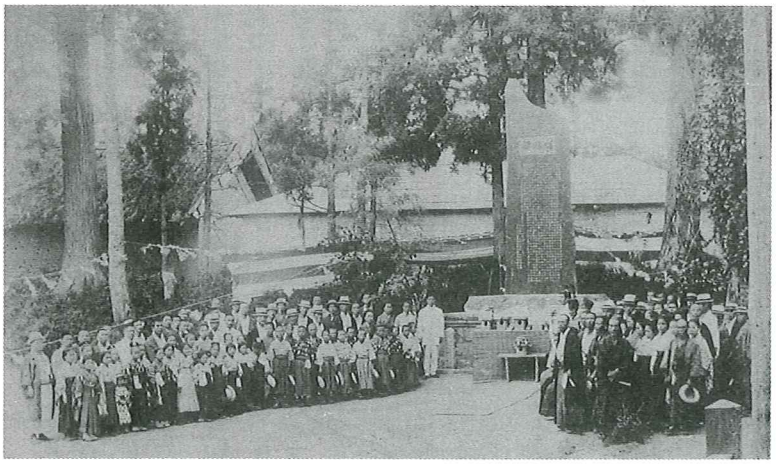
⑩永澤才吉像（市民会館）

明治十七年、古川に上水道を創設した当時の古川村戸長永澤才吉の功績を称え、平成九年に建立されたものである。

（解説・社会教育課文化財係　山下未来）

細川松三郎頌徳碑　古川市有形文化財へ

古川第一小学校正門前の細川松三郎頌徳碑が二〇〇一年度、古川市の有形文化財に指定されました。この碑は吉野作造、三浦吉兵衛ら小学校時代に細川松三郎に教えを受けた門人らによって設置されたもの。細川松三郎（一八六八～一九一六）は栗原郡尾松村出身、宮城県師範学校をでて一八九一年より古川小学校（現古川第一小学校）の訓導として赴任、九九年に校長となり、亡くなるまで古川小学校のために尽くしました。吉野作造にとっては初めての師範学校出の先生だったようです。教えをうけたのはわずか一年ほどに過ぎませんが、東京に行ってからも手紙のやり取りなどで交流があり、一九一六年出版の吉野著書『欧州戦局の現在及将来』に細川に対し「本書一巻を奉呈して感恩の微意を表す」と書きました。頌徳碑建設には吉野、三浦のほか我妻寿三郎、佐々木忠衛門らが尽力し、碑の完成を祝って東京の吉野宅でささやかな同窓会がひらかれました。


細川松三郎頌徳碑落成式（1918年2月）

4月より記念館を運営
「熱き想いを受け継いで飛躍的に発展させる」記念館に

四月一日より、吉野作造記念館は運営をNPO・古川学人に委託されました。具体的な運営方針はこれから決定することになりますが、事務局長の角田稔氏に抱負を語っていただきました。

Q　NPO・古川学人とはどんな団体ですか？

A　吉野作造を顕彰し、研究する団体である吉野先生を記念する会が母体となり、市民運動等に携わってきたメンバーが加わり、両者の価値観が融合して出来た団体です。

Q　団体の目的はなんでしょうか。

A　吉野作造の「民本主義」をよりよい世界を築く手段として捉え、従来までの吉野作造研究・顕彰という記念館のありようを踏まえた上で、市民運動の情報受発信拠点として「民本主義」を実践し、形にする活動を精力的に行っていきたいと考えています。

Q　これからどんな活動・運営をしていきたいですか？

A　行政主導から市民主導のまちづくりへの掛け橋として、市民の利便性に寄与する事業を行います。「市民の勉強部屋」として、吉野に限定しない学習活動の場を市民に提供したり、大学教授の出張講座、フォーラムの開催などを考えています。また学校教育、社会教育との連携、免除規定の拡大、記念館の夜間解放、月曜開館・開館時間の変更も視野に入れて、市民や近所の人々に愛される記念館を目指します。気軽に立ち寄ることのできる親しみのある記念館にします。

角田　稔 氏

NPO法人・古川学人事務局長。㈱角田硝子店主。社団法人古川青年会議所第29代理事長。「市民会議・好きです古川・私の広場」設立に参加。2001年8月より台町TMC代表取締役。

田中昌亮新館長に聞く

四月より田中昌亮氏が吉野作造記念館長に就任します。田中館長は長く吉野先生を記念する会で活動し、「大正デモクラシーと吉野作造」を学ぶ会も主催されています。

田中昌亮氏プロフィール

一九三一年生まれ。山形高等学校理科、東北大学経済学部卒業。現在蛍雪進学教室塾長。吉野先生を記念する会事務局長。一九九三年「吉野作造を学ぶ会」創立。現在は「大正デモクラシーと吉野作造を学ぶ会」を主催。

Q　四月より新館長に就任されますが、記念館への抱負をお願いします。

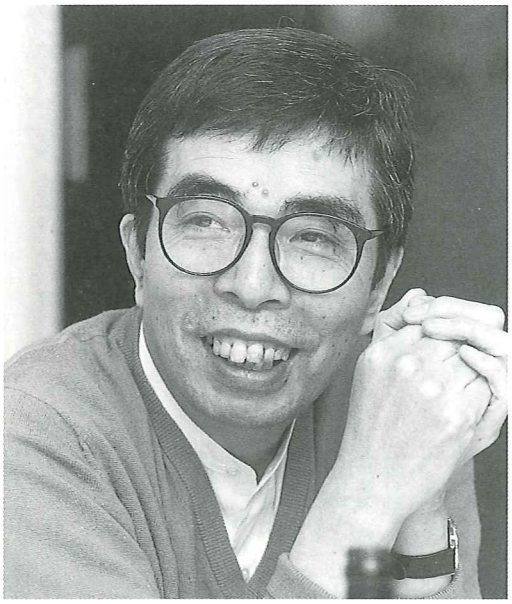
A　先ず吉野に関する資料と周辺資料の収集をもっと充実させる。次に各種の講座を開設し、市民の皆様に参加していただけるようにしたいと思っております。また、明治・大正・昭和の古川の歴史について皆様のご協力をいただきながらまとめてみたいと思います。次に「小説に出てくる吉野とその時代」をテーマに読書会・企画展・劇などで勉強していきたい。映画の上映など、吉野や吉野の時代を再現するような事業を行っていきたいと考えています。

記念館は市民のための記念館である。市民の要望にこたえるよう努力したい。そして、市民の皆様にも記念館を積極的に応援していただきたいと思います。

井上ひさしの吉野講座 再録⑥⑦

本日は吉野作造が一九一四年にお書きになった素晴らしい論文を中心にお話をいたします。全部で三十枚ぐらいの短い論文ですが、題名は「国際競争場裡における最後の勝利」という論文です。これは簡単に言いますと、国際競争の場において、武力さえあれば最後の勝利は疑いないという説が当時の国際常識ですね。つまり国際競争に勝つには武力さえあればいいんだという当時の常識に、吉野作造先生が真っ向から緻密に論理を重ねながら、武力ではだめだということを徹底的に説いた非常に勇ましい気合のこもった論文です。つまり個人の間では道徳がありますよね。ひとをだまさない。ちゃんとした取り引きをする。それからひとの足を引っ張らない。引っ張ったやつは必ず報いがある。詐欺なんかしますと国家が法律をもっていて詐欺をした人を罰するというふうに、個人の間では道徳といいますか法律があって、悪い人を裁くんですが、国際関係においては当時国家より偉いものはないわけですから個人の道徳は通用しないというのが、当時のある意味では常識だったんですが、吉野先生は論文で延々と武力によって衰えた例をたくさんあげ、武力で強力になった国というのは必ずその武力を盾にして、非常に乱暴に傍若無人に振舞うので、結局長い目で見ると武力で大きくなった国家はかならずしぼんでしまうということをずっと論証していくんですね。これは見事な論証です。

この時期、吉野先生は国際連盟に期待をかけるんですね。国家が勝手に傍若無人なことをやっていてはだめだ、国家を束ねる組織をいろんな国家が協力して作らないとだめだということが吉野先生の基本的な立場ですね。「国際競争場裡における最後の勝利」で、最後の勝利は誰が得るかと言うと実は武力ではないんですね。そうではなくてこのときの吉野先生の文脈で言うと、国際連盟という一つの国家を超えた組織を通して、個人の道徳、つまり盗みをしない、人をだまさない、そういうことを貫き通した国家が、最後の勝利を得るというのがこの論文の吉野先生の本意だと思います。


井上ひさし氏

吉野先生が考えていたことは、全然古びていないどころか、非常に先見性があって逆に言うと八十年以上前に言われていることがまだ実現していない。依然として武力が常に勝つんだということを八十年間まだ信じている人たちが大勢いるわけです。このわがままに振舞っている国家が今はどこかなというと、アメリカであることは明らかです。このままいくとアメリカの世紀は終わります、完全に。アメリカにぴったり寄り添って使い走りの国家になっているうちに、日本の私たちの生きている場所はかなりずれて危険な所へ行っているんじゃないか。やっぱり日本は国際社会でいい働きをしながら、あの国がいないと何かさびしいという国になっていくことが大事だというのが、吉野先生の考えであるといって間違いでないと思います。でもそこにはいきなり行けないんで、一歩一歩まずそこに近づいていくしかない、と。（日本は）よく平和ボケと言われますけど、平和ボケ結構じゃないですか。日本は誰も殺していないし、僕らの周りの親戚で戦争で死んだ人というのがだんだんいなくなってきたんですね。これは誇るべきことなんです。戦後軍事行動で人を殺していない国というのは、そう沢山ないんですよ。大国という国ほど殺しているんですよ。でも経済大国世界第二位のGNP、だんだんあやしくなってますが、その国がまだ軍事行動で一人も殺していないというのは、曲がりなりにも憲法前文と第九条をそれなりに守り通してきたおかげなんです。折り合いをつけないとこの小さな地球では誰も生きていけません。国際連合という折り合いをつける機関で、自分をなくさないように折り合って、生きていくしか方法はないんです。「俺の考え正しいから世界中がこうなってしまえ」というアメリカの考えは間違いです。もうちょっと私達は本気で、アメリカの下で生きていくのが幸せなのか、日本独自の生き方をしながらアメリカとも、ロシアともアラビアともアフガニスタンともきっちりやって、いいことはいいと言いだめなことはだめと言い、（アフガニスタンで医療活動をしている）中村哲先生のように人の苦労を助けてあげ、こっちが困ったときに助けてもらうというやり方をとるのか、考えるべきだと思います。吉野先生によれば、これからは個人の道徳が通用する世界にしないとだめだということです。国家の関係は個人の道徳とは違うんだという考え方ではもう地球は狭すぎるのです。

（二〇〇一年十一月三日　「井上ひさしの吉野講座⑥⑦」より抜粋）

古川高校見学感想文

今年も古川高校より一年生が見学に来ました。感想文のなかから二編を紹介します。

私が感じたことをありのままに

一年四組　佐々木　優　太

私は吉野作造記念館を見学し、「吉野作造」という人間を少しではありますが、分かったような気がします。そして大きく二つのことに心を打たれました。

まず一つ目は、「民本主義」の思想です。当時の日本は天皇主権の政治で、そんな中、民主主義を唱えることは憲法に反することでした。そこで、吉野作造は「民本主義」を唱えたのです。今の日本は、日本国憲法で主権は国民に在るとされています。その国民主権を根本で支えたのが、吉野作造の「民本主義」となり、そのおかげで、自由、平等などの様々な権利を得ました。つまり、一世代、二世代昔の知識人が、今の私たちの生活を創造し、支えているのです。このことに気付いたとき、とても強く心を打たれました。

そして二つ目は、大変な努力家であるということです。吉野作造は、宮城県尋常中学校を（現仙台一高）を首席で卒業、旧制第二高等学校（仙台）を首席で卒業、東京帝国大学法科政治学科を首席で卒業しています。しかも、当時最も成績が優秀な人が写真の中央に写ると決まっていて、作造は全ての写真において中央に写っていました。つまり、とても成績が優秀で、エリートだったのです。これらの功績や民本主義の思想、その他の様々な活躍は、影での多大な努力なしでは、ありえません。私はその努力に、賞賛の拍手を送りたいと思うぐらい、強く心を打たれました。

私は、「吉野作造」を少しづつ理解していく過程で、作造が現代人（私たち）に何か訴えているような感じがして、それと同時に、今の自分のことについて考えました。

今、私は十六歳。将来の夢は、中学時代の先生への憧れから、教師になること。その将来の夢をかなえるために、精一杯努力しているつもりですが、その努力は、作造の努力のほんの一握りのように感じました。作造は、私に努力をすることの重み、現代人には、努力をすることの大切さみたいなものを、教えてくれたように思います。また、現代人（私たち）の最も欠如している部分―自分の心の中にしっかりとした意見や信念、夢を持ち、それを表現することの大切さ―を教えてくれたようにも思います。作造は、民本主義という思想をしっかりと持っていて、それを社会という大舞台に表現しました。とても、素晴らしいことです。私は、教師になりたいと思っていますが、それはまだ漠然とした気持ちであり、心の中にしっかりとした具体的な夢がありません。だから、時々、進む道を見失ったり、不安になったりするときがあります。そこで、今、自分の夢を具体的にすることが目標なのです。

あと六年七年も経てば、私は教師という立場の社会人となっていることでしょう。その時は、同じ宮城県民、古川市民の作造の勇気をもらい、社会に貢献したいと思います。教師という立場で、どのような形で貢献できるのかは、見当もつきません。だから、今後の人生の中で努力しながら、見つけていきたいと思います。そして、何らかの形で社会に貢献したとき、一世代、二世代未来の人々、たった一人、誰でもいいから、生活の支えになれば幸いです。

偉大な先覚者

一年六組　三嶋　雄　介

私は吉野作造という人物について記念館を訪れるまでは、中学時代に歴史の授業で学習した『民本主義』という言葉しか頭に思い浮かびませんでした。覚えていたといってもそれは言葉だけで、民本主義とはどういうものなのかということは、はっきりと覚えていたわけではありません。歴史の出来事に私は興味があるので、この吉野作造記念館が古川に設立されたと聞いたときには一度言ってみたいと思っていましたが、なかなか行く機会がありませんでした。

この記念館で最初に見た吉野作造のスライド上映では、現代に一枚しか残されていないという、とても貴重な吉野博士の父と母が写った写真や、吉野の東大教授へ至るまでの過程、恩師等について、そして何よりも、吉野のかつての友人でもあり後輩でもある、古川高校第一回卒業生の鈴木文治さんについても紹介されていました。我が古高からも偉大な人が出ていたと聞いて驚き、そして尊敬しました。

このあとの館内の資料見学では、記念館の目玉とも言え、現代で吉野博士の顔の形が唯一知ることのできる『吉野作造の胸像』や、博士がヨーロッパ留学時に家族にあてたハガキなど、本当に貴重なものについて、記念館の人からの説明もいただきました。私が『吉野作造の胸像』を見たときの第一印象は、とにかく耳が大きいということでした。資料の説明では、吉野は字が汚かったということを言っていました。けれど、一見の限りでは、私にはそうとは思えませんでした。決して汚いとは思えなかったし、むしろ字がとてもうまく見えたからです。でもそれには、吉野博士の母である吉野こうさんのバックアップがあったということを、記念館からいただいた資料から知ることができました。とても厳しく、日々習字の練習をさせていたようで、これによって吉野博士の字はきれいになったそうです。

この記念館見学で最も印象深く私の心に残っていることは、吉野博士が郷土・古川に思いを寄せて書いたと言われる『古川学人』の「路行かざれば到らず事為さざれば成らず」という文でした。印象強く心に残ってはいるものの、この文の意味というものは実はよく分かりません。この文の意味を自分なりに考えてみたのですが、「路を進まなければ巡りつくことはできない、物事は達成しようと努力をしなければ達成できない。」という単純な考えしか思いつきませんでした。要するに吉野博士は、何事も自分から率先して行動しなければなるものもならない、ということを言いたかったのだと思います。

記念館からいただいた資料を見てみると、吉野博士は五十五歳で亡くなられたと記してありました。これは現代の日本の平均的な寿命からみると早い生涯だったように思われますが、彼は短い生涯の間に民本主義を始め、多くの事を成し遂げられました。国を憂い国を愛した偉大な先覚者であった吉野作造は古川市出身ということもあり、私たちの誇り、そしてとても高い目標となっています。吉野作造記念館訪問はすごくいい経験となりました。

企画展紹介

戦後史のなかの吉野作造

―吉野に影響を受けた人々―

大正デモクラシーを駆け抜けた吉野作造（一八七八～一九三三）。吉野の没後、一九五〇年門人たちを中心に吉野博士記念会が発足した。この会に集った人々は総勢一六六名、吉野の同世代も含むが、多くは青年時代に大正デモクラシーを迎え、吉野の思想や行動に何らかの影響を受けて人生の針路を決定した。生前に多彩な活動をした吉野は、学問の世界だけでなく、政治・社会に様々な種をまいた。特に東京帝国大学学生基督教青年会（以下東大ＹＭＣＡと略す）、新人会からは戦後社会の立役者を輩出している。メンバーはおよそ、宮城県出身者、第二高等学校、同忠愛之友倶楽部、弓町本郷キリスト教会、東京大学、東大ＹＭＣＡ、新人会、賛育会、社会民衆党、明治文化研究会に含まれる。企画展では、様々な形で戦後に活躍した記念会のメンバーを取り上げ、彼らが吉野から受け取ったものは何であったか、記念会例会記録および吉野作造日記を中心に紹介した。

吉野の影響はおおよそ三つに分けられる。ひとつめは、吉野の大学での講義や講演内容に影響をうけた人びとである。戦前・戦後一貫して日中の掛け橋として活躍した伊藤武雄（一八九五～一九八四）は大学二年の際、吉野の中国革命論の講義により、「最初の科学的中国認識」を得た。学生時代は吉野の講義を聴くためだけに大学に通ったという伊藤は、その後満鉄に入社、科学的な中国調査を遂行して行く。戦前は国際連盟・戦後国際連合で活躍した原田健（一八九二～一九七三）も『中央公論』掲載の吉野の朝鮮論に感化され、卒業当初は朝鮮半島で働きたいと考えた。政治学者の今中次麿（一八九三～一九八〇）も一九一六年十月一日の日記に吉野の中国論を聞き、中国と日本の現状の類似性、国際関係は正義人道に基づくべきだとの内容に感銘を受けている。

政治学者蠟山政道（一八九五～一九八〇）は「自由」という概念で近代政治史の問題を国家を横断して解き明かした吉野の政治史講義によって政治史に大きな関心をもったと述懐している。その一方、体系的な論理の構築を必要とする政治学の講義は失敗だったと語っている。最高裁判事で憲法学者の河村又介（一八九四～一九七九）は、『中央公論』に掲載された民本主義論に憧れて法科への進学を決意した。

二つめに吉野の社会運動実践からの影響があげられる。一九一八年十一月二十七日吉野作造と右翼団体浪人会との立会演説会が開催された。当日は吉野の身辺を守るため多数の学生が参加、会は吉野側の勝利に終わった。翌月、吉野中心に東大法科生らが結成した普通選挙研究会のメンバー等により社会運動団体新人会が結成された。当初吉野や民本主義を守るための団体であった新人会には、数多くの記念会メンバーが名を連ねている。

また吉野が理事長時代、東大ＹＭＣＡは学生たちによる様々な社会事業の実践の場となった。藤田逸男（一八八六～一九五八）を中心とする母子保護事業の賛育会病院、消費組合の家庭購買組合運動が展開された。藤田によれば賛育会は吉野の人道論を、家庭購買組合は吉野のデモクラシー論の社会経済面での実践活動であった。組合は戦前の消費組合運動のモデルだと評価され、賛育会は現在も墨田区で事業を拡大し活動している。戦後首相となった片山哲（一八八七～一九七八）と衆議院議長星島二郎（一八八七～一九八〇）らの貧困者のための法律相談所事業も行われた。経済学者大内兵衛（一八八八～一九八〇）は、東大の食堂で吉野の周囲は常に談論風発、活気の中心であったと回想している。

三つめに、吉野から受けた人格的影響があげられる。主に日本電気で実業人として活躍した石川清（一八八一～一九八四）は東大ＹＭＣＡ時代に吉野の信頼を得て吉野家の用心棒をまかされたが、就職のあっせんから見合いの世話まで際限なく、親切の限りを尽くす吉野について回想している。吉野の世話で結婚したのは、外科医の大槻菊男（一八八七～一九七七）、大審院検事の山井浩（一八九一～？）、政治学者神川彦松（一八八九～一九八八）ら多数。新聞記者の新居格（一八八八～一九五一）は、新聞記者時代何度も吉野に「首をつないでもらった」。住谷悦治は、バイブルの「右手のしたことを左手に知らせるな」という言葉を吉野は実践していた、とその親切さをキリスト教精神に見出している。英文学研究者斉藤勇（一八八七～一九八二）は、東大ＹＭＣＡで吉野を尊敬していた一人だが、吉野を尊敬すればこそキリスト教を信じる、というＹＭＣＡ会員が多かったと述懐、吉野の人格的影響の大きさを指摘している。（文責・田澤晴子）

1917年、神川彦松・美知子結婚式。吉野作造夫妻仲人

2001年度事業レポート

◎3月6日～5月31日
企画展「柳田國男と吉野作造」
◎5月3日
昔語りの会
◎5月4日～5月6日
ビデオ上映会（アニメ）
◎7月25日～7月27日
中高生のための吉野作造講座
◎7月21日～8月31日
館内探険！吉野作造を探してみよう
◎9月16日～10月31日
企画展「吉野作造・言葉の宇宙」
◎9月16日
よみ語り・吉野作造
（古川オフトーク通信　千葉めぐみ氏朗読）
◎10月13日
古川の近代化遺産をめぐる（解説・山下未来）
◎11月3日
井上ひさしの吉野講座⑥⑦
◎11月25日
古川の近代「十五年戦争と市民」
（仙台市博物館長　佐藤憲一氏）
◎3月21日～5月19日
企画展「戦後史のなかの吉野作造」

二〇〇一年　受贈資料一覧

（順不同・敬称略）

〈資料名〉	〈寄贈者〉
『経綸のとき　近代日本の財政を築いた逸材』	尾崎　護
『滴ひかる　明治ひと模様』	〃
『低き声にて語れ―元老院議官　神田孝平』	〃
『大正デモクラシー・天皇制・キリスト教』	富板キリスト教センター
『戦闘的自由主義者　河合栄次郎』	松井慎一郎
『住谷天来と住谷悦治―非戦論と平和論―』	手島　仁
『読売vs朝日　社説対決50年』	読売新聞社
『日々編集　嶋中鵬二遺文集』	嶋中　雅子
吉野作造と東京帝大生（写真）	〃
『ビック・リトル・ノブ―ライトの弟子・女性建築家土浦信子』	田中　厚子
『井上ひさしの農業講座』	佐々木樹一
『井上ひさし伝』	〃
『天開の驥足―千葉豊治物語―』	横山　寛勝
『平民社時代』	〃
「吉野作造と東アジア」佐々木力氏講演会テープ	〃
『復刻　世のうはさ』	田熊渭津子
『群山』二〇〇一年三月～二〇〇二年二月	扇畑　利枝
「暮らしの手帖　第二十八号」	暮らしの手帖社
「自由学園80年小史」	自由学園
「順蔵手控帳〝閑居の友〟雑感」	櫻井　滋郎
「日本歴史　第六四四号」	日本歴史学会
「初期社会主義研究　第十三号」	太田　雅夫
「資料　宮城英学校設立趣意書」（抜刷）	〃
「根岸橘三郎『新島襄』をめぐって―柏木義円の批判を中心に―」	〃
「吉野作造と柏木義円―吉野書簡を中心に―」	〃
「桃山学院大学教育研究所研究紀要　第十号」	〃
「ふるさと古川の環境を捉え、その対応に努力した方々」	阿部　林治
「平成十四年版　仙台市小学校社会科年間指導計画」	熊谷　裕行
「歴史資料集第六号　家庭購買組合―設立から解体へ―」	井上　史
「西　常雄　自選展」	柳田冨美子
「丸山眞男手帖　第一九号」	飯田　泰三
「私の父の記憶」	後藤ゆき子
「JAPAN BAPTIST　第119号」	和泉　富夫
「世界文学月報」	菅原　一也
「東北自由新報」	〃
「婦女新聞要項」	〃
「婦女新聞」	〃
「柳田國男の一九二〇年代社会論」（抜刷）	秋山　真一
「帝国改造の政治思想―世界戦争期の吉野作造―」（抜刷）	平野　敬和
「八木重吉と富永徳麿―晩年の再会を中心に―」（抜刷）	今高　義也
「吉野作造の外交論・平和論とその軌跡―第一次大戦下にあらわれた現実主義と理想主義―」（抜刷）	藤村　一郎
「アリラン通信No.26」	山田　昭次
吉野作造執筆資料　「弘前新聞」その他	〃
宮城伊兵衛（写真）	田中　昌亮
海老名弾正宛の小山東助書簡原文コピー	その他
「吉野作造と東アジア」（レジュメ）	西田　耕三
「吉野作造の社会事業と福祉思想」	佐々木　力
[redacted]	佐藤　富美
[redacted]	[redacted]